

第三章 旅立ち

<2012年8月21日>

それは突然にやってきた、朝から末っ子がセミをとると2番目（次女）が追いかけて廻し、奥の桜の木から巣の周りの枝から枝へと、飛び回っている。

やがて巣のある隣の桜の木のいつもの場所にじっとする末っ子、



2012年8月21日雲ひとつ無い青空に向かい、ツミの末っ子（雄）がAM10時桜の木から電線に飛び移り、更に巣から遠くの電線に移動、10時1分ゆっくりと飛び出し、上空にむかって螺旋を3回描く帆翔（はんしょう）そして10時2分市街の上空を一気に滑空して消えて行った。

後に残った一番子はこの末っ子の旅立ちを見届けたように、道路上を滑空して、視界から消えて行きました。

「終わったね」と家内に言えば「よかったね、チビが元気で行って」

学校の夏休みもそろそろ終盤、中庭の植木を剪定している先生

を残して、日本で一番小さな鷹の末っ子が旅立った。

エピローグ (epilogue)

<2012年 8月 22日> 朝2羽が仲良く並んでいるのに出遭う。

末っ子の去った桜の木に AM:9時を回った頃様子を見に行って見た。

初めて見る光景に出遭い思わず家内に「末っ子が居なくなって2番目も寂しくなったのかな?」「そうかも」(もうどっちが1番か2番か区別できない)



11 時頃には1羽が奥の桜の木に飛んで、そのまま出てくる気配はなかった。

午後4時に来たときには、1羽しか姿が見えず、いつもセミが飛ぶと何処からともなく飛来した姿も見られず、結局このまま姿を見ることはなかった。

<2012年 8月 23日> 昨日消えた1羽はあのまま旅立った様子だ。

今日は、最後の1羽が朝9時30分から11時30分まで、最後の顔見世で私達に付き合ってくれた。



この最後の1羽、翌日の朝、10時に一度姿を見せ、そして旅立って行った。

こうして44日間の日本で一番小さな鷹“ツミの子育て見たままの記”が終わった。